

東海市立平洲記念館・郷土資料館館長

立松 彰

81期史



東海市は、愛知県の知多半島付け根の伊勢湾側にあります。人口10万6千人ほどの市で、名古屋南部臨海工業地帯の一角を占め、新日本製鐵名古屋製鐵所をはじめとする製鉄関係の工場があります。農業も盛んで、ふき、たまねぎ、洋ラン、いちじくなどが作られています。そんなことから「鉄とランの町」をキャッチフレーズにしてきました。かつては伊勢湾での漁業も盛んで、海苔養殖も行われていましたが、臨海部を埋め立てて工業地帯としたため、縄文時代以来の8千年の営みを終えました。

この町に、昭和49年(1974年)に市立の平洲記念館と郷土資料館ができ、私は開館当初から運営に携わってきました。平洲というのは、江戸時代の儒学者で、疲弊した藩を建て直し名君として称えられた米沢藩主上杉鷹山の師として有名です。この細井平洲の出身地であり、古くから遺徳顕彰がなされてきました。

東海市も、現在は主に考古学を専攻してきた学芸員が2名いますが、私の頃には、そうした職務での採用ではなく、有資格者ということで一般事務職として雇用されました。

こうした地域での学芸員職の最も必要な資質は、協調して市民と関わることです。資料の調査収集から展示活用に至るまで、その住んでおられる方とのつながりがなくては、何もできません。いろいろなアンテナを張って、絶えず情報収集に努めることが必要です。そして、どんなことにも真摯に対応して、信頼を得ていかなければ資料館活動も広がっていきません。そこで、必要となるのが、とにかくいろいろなことを学び知って、まわりの人から重宝がられるようになることです。かつ、どんなことでもいいから一つは専門的に深く知っている、それが個性になって、より一層、周りの人に育んでいただくことができます。そこで、「雑芸員をめざせ」となるわけです。雑とは、雑草・雑種のいろいろなものが入り混ざったこと。芸とは、身につけたわざで、とにかく雑多なことを身につけ表現していく、ということです。

ところで、いま芸人とか芸術と、「芸」の字を表記しますが、ほんとうは「藝」なんですね。「芸」は奈良時代に石上宅嗣が設けたわが国最古の公開図書館といわれる芸亭の「うん」なんですよ。実は、このことは大学で学びました。授業は、とにかく一生懸命聞きましょう。

とにかく、地域には、考古資料、歴史資料、民俗資料と何でもあります。考古の資料も、縄文時代から近世まで、土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、常滑焼、瀬戸物といろいろあるし、古文書も出てきます。とっつきやすいのが民俗資料ですが、これもきちんと調べないと使い方もわからない。これらを、とりあえずすべて取り扱うわけです。大変なことです。そこで、いろいろな方の教えを受けるしかありません。これも、積極的にアタックして、まさに開拓していくしかありません。誰であっても、きちんと教えを乞えば、教えてくださいます。

思い出話をひとつ。製塩遺跡を発掘したとき、その様相がよくわかりませんでした。関係遺跡の報告書や論文を読んでも、よく理解できません。思い切って、古代土器製塩の研究を導いておられた岡山大学の近藤義郎先生にお手紙を出しました。そして、岡山へ出かけました。近藤先生は、御自身が集められた各地の製塩土器を手にとって見せてくださるとともに、詳しく研究成果を教えてくださいました。昼食もご馳走になって帰ってきました。その後、近藤先生が『日本土器製塩研究』を編集されたとき、「愛知県」を担当させていただきました。身近にもこうして教えていただく方が、たくさんみえます。実のところ、なかなかしんどいことですが、そうして、地域の雑芸員になっていくと、いいですね。

現在、高齢者を預るデーサービスなどにおいて、回想療法と称して、かつてその人が過ごしてきた中で実際に使った生活用具や道具をとおして、脳の働きを促がす活動が行われています。実は、こうした活動の企画立案にも、学芸員の立場から、いろいろとアプローチできます。高齢化社会にあって、今後、そうした新たな展開も出てくるものと思います。



左 館正面前

右 奈良時代に使われた
知多式の製塩土器